

自了筆 白沢之図

1幅 縦80.0cm 横35.6cm

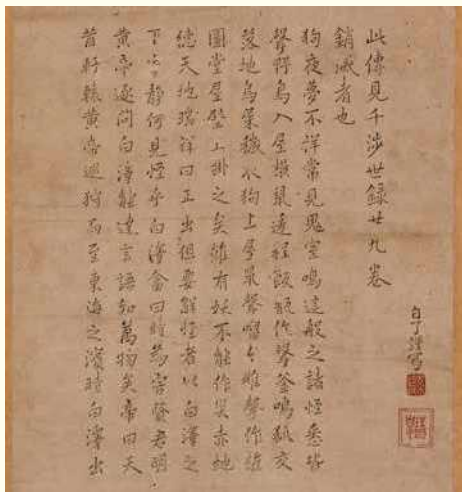


とても不思議な
絵だね。
引きこまれそう。

尚豊土から「自了」という
名前をいただいたんだ。独
学で絵の技術を磨いたと
いうからビックリだね。い
くつかの作品を残してい
たんだが、残念なことに大半
が沖縄戦で焼失してしま
ったんだ。



天才画家自了の貴重な作品



縦書きなのに左から始まる賛



自了筆白沢之図



自了の落款



白沢(中国の想像上の神獣)

自了とは、画家である城間清豊(1614～1644年)の雅号で、唐名は欽可聖です。自了は生まれつき話すことが出来ず、両親は学問をさせませんでした。しかし、探究心旺盛な彼は後に優れた画才を発揮するようになり、国王から非常に可愛がられ「自了」の雅号を与えられました。

彼の作品は、冊封使から中国の名高い画家の作品と同様に優れた作品として称賛された

り、慶賀使が持参した作品が江戸の狩野安信に認められるなど、国内外において高い評価を得ました。

この白沢の絵は「夢喰」の別名で親しまれており、絵の上部にある賛は通常とは異なり、縦書きにもかかわらず左から文章が始まります。紙本着色で、自了の押印がある作品としては沖縄県に現存する唯一の作品です。

県指定有形文化財(昭53.4.1)

けん ぼん ちゃく しょく か ちょう ず
絹本着色花鳥図
そん おく ひつ
孫億筆

1幅 縦90.5cm 横45.6cm



とてもすごい
画家さん
だったんだね。

孫億は、明代末から清の
初期にかけて活躍した画
家だよ。多くの作品が江
戸時代の日本にもたされ
ているんだよ。



琉球の絵師を育てた巨匠の絵



孫億の落款



絹本着色花鳥図孫億筆



鳥(拡大)



鳥(拡大)



牡丹(拡大)

孫億は17世紀末～18世紀初めにかけて中
国の福州で活躍した画家で、花鳥図などの伝
統的な写生画を得意としています。

琉球の絵師である石嶺伝莫(琥自謙)や上原
真知(查秉信)、山口宗季(吳師度)らは福州に
渡り、孫億の指導を受けました。孫億の画法は
これらの絵師達によって琉球に伝えられ、山口

宗季の弟子で琉球を代表する画家の座間味庸
昌(殷元良)にもその影響を見ることが出来ます。

久米島の喜久村家に伝わるこの花鳥図は、
1756(乾隆21)年に来琉した冊封使一行が
久米島沖で遭難した際、救助にあたった地頭
代(ジトゥデー)の喜久村絜聡に感謝のしるし
として贈ったものです。

県指定有形文化財(昭54.4.9)

けん ぼん ちゃく しょく か ちょう ず
絹本着色花鳥図
いん げん りょう ひつ
殷元良筆

1幅 縦98.7cm 横42.7cm



鳥や花が
生き生きと
描かれているね。

殷元良は、国王が直接保護した、土府お抱え絵師として活躍した人なんだよ。中国絵画の技法を生かしながら、日本絵画の影響もみられるんだ。



琉球五大画家のひとり、殷元良



「中山首里殷元良」の落款



絹本着色花鳥図殷元良筆



竹にとまる小鳥(拡大)



梅と椿(拡大)

殷元良は、座間味庸昌(1718~1767年)の唐名です。9歳の頃から優れた才能を発揮しており、12歳から首里城で育てられ、山口宗季(吳師虔)から絵を学びました。三司官の蔡温から「廷器」の称号を贈られ、尚敬王からは「中山首里」「殷元良印」「廷器氏」の3つの印を拝領しました。

1752(乾隆17)年に進貢使の一員となって中国に渡り、1754(乾隆19)年に帰国して、尚

敬王の御後絵(肖像画)を制作しています。1759(乾隆24)年には、座間味間切の総地頭を拝命し、座間味姓を名乗りました。近世の琉球画壇を代表する画家です。

この作品は、絵の右側から左下と左上に伸びる梅の樹と竹、小鳥、椿の配置や表現、そして彩色に細かく気が配られており、殷元良の画風を知る上で貴重な作品です。

県指定有形文化財(昭54.4.9)

紙本着色雪中雉子の図 殷元良筆

1幅 縦143.7cm 横67.2cm



寒い雪の中で、たくましく生きる雉子の様子が描かれているね。

画面全体が茶褐色と白色で統一されているので、花と鳥の色が絵の印象を引き締める役割を果たしているんだ。また原図の「雪中花鳥図」は残念ながら、2019年10月31日の首里城の火災によって焼けてしまったんだ。



琉球で描かれた雪景図の傑作



「中山首里殷元良」の落款



紙本着色雪中雉子の図 殷元良筆



①殷元良の作品のもとになった章聲の雪中花鳥図



雉子(拡大)

(写真提供:①一般財団法人 沖縄美ら島財団)

「雪景花鳥図」とも呼ばれる作品です。この絵は左から右に向けて水墨の濃淡で岩と雪の積もった樹木を力強く描き、中央にはつがいの雉子と花を鮮やかに描いています。モノクロームの岩と樹木がどこまでも厳しい冬の冷たさを示す一方で、その中で寄りそう雉子と花の色合い

が花鳥の生命感をより強調し、印象を深めています。

この絵は、首里城にあった清代中国の画家章聲の「雪中花鳥図」を模写したのですが、原画にひけをとらない素晴らしい出来ばえです。

県指定有形文化財(昭57.3.4)

紙本墨画竹の図 殷元良筆

1幅 縦101.7cm 横45.4cm



水墨画って、
琉球でも
描かれていたんだ。

水墨画は、墨の濃淡やぼ
かしのみで表現した東洋
特有の絵画様式で、琉球
でも描かれているよ。



琉球の水墨画の到達点



「壬午孟夏中山殷元良」
の落款



紙本墨画竹の図殷元良筆



淡い墨で描かれた竹(拡大)



濃い墨で表された岩や竹(拡大)

殷元良(1718~1767年)は、尚敬・尚穆王時代に王府の絵師として活躍した琉球画壇を代表する画家です。

この作品にある落款の記録によると「壬午」とあり、1762(乾隆27)年、殷元良44歳、亡くなる5年前に制作された作品であることがわかります。

画面前景の岩や竹を濃い墨で表し、背後の竹は潤いのある淡い墨を生かして描いており、墨の濃淡を利用した卓越した技法がみられます。殷元良晩年の作品として貴重なものです。

紙本着色 奉使琉球図

1巻 縦32.5cm 横1256.0cm



冊封使って、
どのくらい琉球に
滞在したのかな？

だいたい4か月から8か月
くらい滞在したんだ。琉球で
は24回も冊封使をお迎え
しているんだよ。



絵で見る冊封使の琉球体験



冊封宣詔(首里城で冊封の式典を行う)



候風十日(風を待つこと10日)



入境登岸(那覇港に着き上陸する)

中国皇帝の命を受け、琉球を訪れた冊封使一行の行程を描いた絵巻です。

福州の港を出て那覇港に錨を下ろし、崇元寺において先王の諭祭を行い、首里城正殿で新王を認める式典をすませ、帰国するまでの20の場面が描かれています。

始めに福州を出航する場面が描かれており、その他については以下のとおり各場面のテーマが、それぞれ絵の左上に記されています。

「福州登舟」「羅星取水」「諭祭海神」「閩安観

兵」「五虎放洋」「午夜過溝」「順風千里」「姑米索舟」「候風十日」「履陰如意」「姑米開帆」「入境登岸」「諭祭千王」「冊封宣詔」「重陽競渡」「事竣登舟」「山東避風」「大霧停舟」「舟抵福州」。

サインには「朱雀年」とあります(雀は鶴の略字)。朱鶴年は、清国泰州の出身で、字は野雲と言います。山水画をよく描き、人物や花々、岩や竹も得意であったと言われます。この絵巻は中国と琉球の冊封関係を示す絵画であり、冊封使の沖縄までの航路を知る資料としても貴重です。

紙本着色 冊封使行列図

1巻 縦25.3cm 横2242.5cm



600名の行列を描いているんだ。すごく立派な行列だね。



この時の冊封副使・周煌は『琉球国志略』という、琉球を広く紹介する本を書いたんだ。



描かれた冊封使一行



輿に乗る冊封正使・副使



「肅観」「廻避」の牌を持つ冊封使一行



先導の琉球人

この絵画は18世紀半ばの作品で、新琉球国王任命のために中国皇帝の使者として琉球を訪れた冊封使一行が、首里城へ向かう行列を描いたものです。

縦25.3cm、長さ2242.5cmの中に、琉球人約380名と冊封使約220名の合計約600名が描かれています。

行列の先導は琉球人で、「金鼓」「令」の旗や

路次楽隊、儀仗兵が続きます。「肅静」「廻避」の牌からが冊封使一行で、儀仗兵、騎馬の武官・文官、牌、吹鼓隊、龍亭・彩亭などの後に正使・副使が描かれ、後には長刀を持つ儀仗隊、旗隊、騎馬の文官が続きます。冊封使の身分を示す「翰林院侍講」の牌から、1756(乾隆21)年の尚穆を国王に任命するために派遣された冊封使、全魁・周煌一行だと考えられます。

県指定有形文化財(平18.9.12)



威厳さえ感じる絵だね。

山口宗季は、中岡の花鳥画の第一人者・孫億から「物静かで温厚な中にも強い芯を持つ人物」だと高く評価されているんだ。また股元良など、後の琉球絵師たちを指導したんだ。



呉師虔のミステリアスな猫



神猫(拡大)



山口宗季の落款

神猫図山口宗季筆

この神猫図は、近世琉球初期の王府の絵師である山口宗季(1672~1743年)によって描かれた作品です。落款として「乙巳仲夏球陽呉師虔写」とあり、製作年は1725(雍正3)年と考えられます。

宗季は那覇泉崎村の花城筑登之親雲上宗未の長男として生まれ、唐名を呉師虔、字は子敬、号が雲谷となっています。1691(康熙30)

年に画才が認められ、貝摺奉行所の絵師になり、1703~1707(康熙42~46)年に福州へ留学し孫億ら現地の絵師から絵を学びました。帰国から3年後の1710(康熙49)年には、絵師主取に任命されました。その評判とともに琉球国における中核の絵師となった宗季は、薩摩の島津家や京都の近衛家からも花鳥画の依頼を受け、琉球絵画の評価を高めました。

(写真提供:那覇市歴史博物館)

紙本着色東任鐸(知念里之子親雲上政行)画像

し ほん ちゃく しょく とう にん たく ち ねん さと ぬ し べー ちん せい ぎょう が ぞう

附 一、教訓十箇条 一、掛物入箱

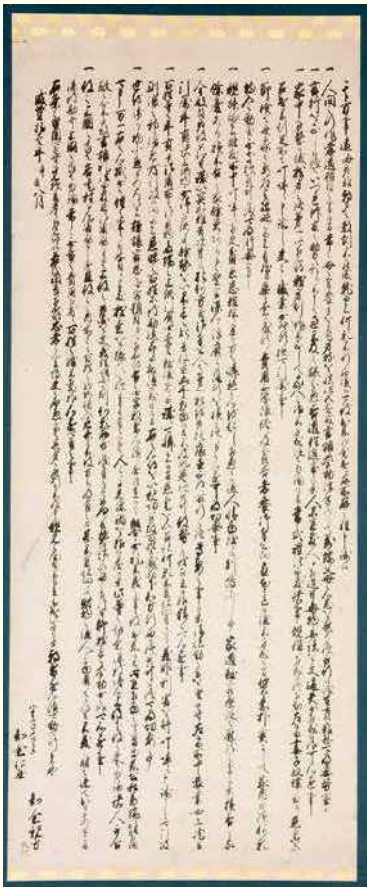
画像1幅 縦123.0cm 横67.0cm 附 教訓十箇条1幅 縦123.0cm 横52.0cm 掛物入箱1箱



父親の子どもに対する愛情が感じられる絵だね。



八重山に残された首里士族の肖像



教訓十箇条



紙本着色東任鐸(知念里之子親雲上政行)画像



東任鐸(知念里之子親雲上政行) (拡大)

絵の右上に書かれている文章は、子どもが生まれた喜びなどが素直に書かれているんだ。だから優しい表情をしているんだね。また十箇条は、成人した子どもへの心構えなどが書かれているんだ。



この絵は、首里士族の東任鐸(知念政行)61歳の肖像画です。

絵の上部にある東任鐸自筆の賛によると、1835~1838(道光15~18)年の間、八重山島在番として赴任していたことが分かります。この肖像画は、東任鐸が首里に戻った翌年の1839(道光19)年に絵師に描かせたもので、八重山の女性との間にもうけた息子である真

山戸へ送ったことが分かっています。附の『教訓十箇条』は、真山戸が20歳になり、首里に上った時に贈られたものと考えられます。

この絵は、賛により制作の経緯も明らかであることから重要であるとともに、陰影法を取り入れた様式は、琉球の肖像画の特徴をよく示すものとして貴重です。



何歳の頃の肖像画だろう。

何歳かははっきりわからな
いけど、知念親雲上の表情
とは違って、厳しい雰囲気
の表情で描かれているね。
また、大帯や着物の繊細な
模様、眼まで丁寧に細かく
描いているよ。



し ほん ちゃく しょく
紙本着色
みや ひら ちょう えん が ぞう
宮平長延画像

1幅 縦101.0cm 横81.5cm



描かれた八重山の有力者



紙本着色宮平長延画像



顔(拡大)



帯(拡大)

この絵は、八重山島大浜間切の頭職等を勤めた宮平長延の肖像画です。

画面いっぱいに人物を描き、龍模様の大帯と緑地に唐草模様の衣裳を身にまとい、黄色の冠(帟)をかぶり、右手に扇を持ち、やや色黒の白髭の人物が菊唐草模様の赤い座布団の上に

座った構図となっています。

この絵は、人物の顔つきや冠、衣装、帯の様子が丁寧に描写されていることから、1745(乾隆10)年に長延が首里に上った際に描かれたものと考えられ、近世期の八重山士族を描いた数少ない作品として貴重です。

しほん ちゃくしょく きくむら けいそう かたみ じとう であー そう
紙本着色喜久村絜聡(片目地頭代)像

つけたり いち び はい りよう おび
附 一、御拝領帯

1幅 縦130.2cm、横72.6cm 附 御拝領帯 3本



仲里間切の人々から慕われていた人物なんだろうね。



冊封使一行を救った久米島の片目地頭代



下の落款は
左は満州文字
右は漢字で
表されている



紙本着色喜久村絜聡(片目地頭代)像



喜久村絜聡(片目地頭代)像(拡大)



帯(拡大)



御拝領帯

絵師が気を使い、絜聡の両目を描いたんだけど、絜聡は片目に描き直させたという伝承が久米島に残っているよ。



くめじま なかま ぎくむら けいそう じとう であー
久米島仲里間切の地頭代(ジトゥデー)であった喜久村絜聡47歳の肖像画です。

賛によると、絜聡が家譜の編集方法を学ぶため首里に滞在した時に、首里あるいは那覇の絵師に描かせたものとされています。喜久村絜聡は左目が見えないところから、「片目地頭代」のあだ名があり、この絵にも左目の障がいが描かれています。

きくむら けいそう
喜久村絜聡の名を広めたのは、1756(乾隆21)年に久米島で冊封船の海難事故に遭遇した時、地元の住人を指導し、使節一行を無事救助したことです。この絵の上部の賛には冊封船遭難の様子が記録されており、当時の状況を知る上でも重要な資料となっています。

この絵は琉球の肖像画の特徴を考える上で、極めて貴重な作品です。



琉球国では1592年から1630年にかけて、金工品、漆器、陶器、織物などの工芸技術が中国や日本から積極的に導入されました。そしてその導入の後を追うように、王国のデザイナー、「絵師」の育成がはじまっていきます。

1645年には、薩摩藩絵師の梁瀬清右衛門から崎山喜俊(李基昌)が絵画を学んでいます。1681年には石嶺伝莫(瓊自謙)、上原真知(查秉信)が、1703年には山口宗季(呉師虔)が、それぞれ絵を学ぶため中国に派遣されました。

こうした工芸技術の導入や絵師の育成は、16世紀末から17世紀にかけての琉球国をとりまく国際環境に大きく起因します。中国・朝鮮・日本や東南アジアを結ぶ中継貿易によって国家経営を行ってきた琉球は、16世紀のヨーロッパ勢力の進出によって交易活動が困難になり、1570年には東南アジアへの船の派遣を停止しました。さらに、王府は薩摩侵攻を大きなきっかけとし、これまでとは異なる国家経営の方法を模索していきます。そうした中で、香木などの南方からの産物に代わる自前の製品を組織的に生産するため、1592年の金奉行の任命から1703年の絵師の中国派遣までの約100年もの時間をかけて工芸技術の育成を図りました。ここで、特筆すべきは王府が工芸技術者だけでなく、デザイナーである絵師の育成を行っていることです。

近代以前の東アジアにおいて外交の中で交わされる贈り物は、相手国への敬意を示すと同時に、自国の技術力や文化力を示すため欠かせないアイテムでした。小国である琉球にとって、贈り物である工芸品のデザインは、国際社会で自らの存在感を高めるという重要な意味を持っていたのです。そのため、近世琉球期、王府はデザイナーである絵師の育成に力を入れ、貝摺奉行所へ配属しました。つまり、琉球王国のデザイナーである絵師達は、デザインによって外交を支える国家公務員だったのです。

また、貝摺奉行所に配属された絵師たちは、漆器のデザインだけでなく、紅型の衣裳、御絵図、植木鉢など、沖縄の伝統的とされるほとんどの工芸デザインに関わっていました。琉球国時代に貝摺奉行絵師たちが国運をかけたデザインは、沖縄デザインの原点と言えるでしょう。



「御用植木鉢下図」
(提供：沖縄県立博物館・美術館)

本文は、平川信幸、2015年、「国家公務員=デザイナー」『モモト』Vol.22号、東洋企画印刷を加筆修正したものです。